
明久「そろそろ本気出す」

◆LLhURARKH2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明久「そろそろ本気出す」

【Nコード】

N9562Y

【作者名】

◆LLhURARKH2

【あらすじ】

私がニュー速vip板にて投下していたSSが都合により完結出来なかったのでこちらに投稿させていただきます。

連載小説となっておりますが都合により、尺をわけただけなので実質短編と言っても間違いではありません。

ではどうぞ。

前編（前書き）

このSSは私の意思関係なくなぜかアンチ美波になっています。
それが嫌な方はお戻りください。

前編

「いいかげん馬鹿のフリはやめだ、やめ。正直疲れる」
翌日。

「よお、明久。今日は早いじゃねえか。なんか悪いものでも食べたか？」

「雄二か……相変わらずゴリラみたいだな」
そう言った途端、僕の顔面にカッターが飛んできた。

シュッ！！

パシッ！！

「なに……？」

「相変わらず短期なゴリラだな、全く」

「明久君、おはようございます！」

そう言って僕に話しかけてきたのは、Aクラス並の学力を持ちながらも振り分け試験で体調を崩してしまい、仕方なく退席しFクラスになった姫路瑞希。

いつかあの胸を自分の物にするんだ……！

「ちょっとアキ、瑞希のどこ見てんのよいやらしいわね」

僕に注意してきたのは島田美波。

関節技時に僕に当たる僅かな胸の感触も捨てがたいがひんぬーに用はない。

僕は美波の関節技を難なく回避し、美波を地に這い蹲らせた。

「ち、ちょっとアキ？ なにすんのよ！？」

「普段僕に関節技をかけているのにかけられるとなったらそれか」

「あ、明久君……？」

「やりすぎじゃ、明久！」

「……………やめる明久（パシャパシャ！）」

爺口調で止めてきたのは木下秀吉。

第三の性別「秀吉」を所有している唯一の人間だ。

パツと見女にしか見えない容姿を持っており双子の姉よりも女に見えるのは気のせいではないだろう。

口数が少なく、カメラをたいているのが土屋康太。

重度のムツリで保健体育の知識なら右に出る者はいないと言われている。

「い、痛い……お願いアキ、離して……！！」

「「「異端者を殺せええええええええ！！」」」

僕の周りにはいつのまにか魔術師のような格好をした集団、通称FFF団がいた。

「ちっ、思ったよりも早かったな……」

流星に一对多は不利なので僕はすぐに教室を飛び出した。

「逃がすな、追え!!」

どうやら逃がす気は微塵もないみたいだ。

さて、どうする？

僕が逃げ回っていると目の前に鉄人が現れた。

しめた!

「鉄人! Fクラス吉井明久がFFF団全員に数学で勝負します!」

「ん? 朝から何をやっ取るんだ貴様らは……まあいい、その勝負承認する」

今日は鉄人があっさりしてて助かった。そして僕は召喚獣を呼び出す。

「試獣召喚!」

Fクラス 吉井明久 数学 64点

VS

Fクラス FFF団 数学 平均73点

都合のいい事にここは廊下、狭いから大人数でかかってくる事はできないはずだ!!

僕は落ち着いて一体一体を木刀で倒していく。

僕が観察処分者という事もあって操作は皆よりも長けているのもあり、模擬戦は意外に早く終わった。

「くっ……吉井のくせに頭を使うとは！」

「戦死者は補習うううううううう!!」

「覚えていろ、吉井！」

まるで嘸ませ犬のような発言を残し、最後まで残っていた須川は鉄人に文字通り補習室に持っていかれた。

さて、クラスに戻ろう。

お昼休み。

僕は昨日のうちにいらなくなったゲームをありったけ売ったから懷に余裕がある。

僕は学食を若干楽しみにしつつ、クラスを出ようとしたら姫路さんに呼び止められた。

「あの……明久君」

なんかいやな予感しかない。

「よかったら……お昼ご飯弁当作ってきたので………これどうぞ！」

そう言って差し出してきたのはピンク色の可愛い弁当箱。不思議だ、僕には禍々しいオーラを弁当箱から感じる。

「今日は……どんな味付けしたの？」

恐る恐る聞いてみると姫路さんはエッヘンとその大きな胸を張り、若干ドヤ顔をしながら今日の隠し味を教えてくださいました。

「塩酸と水酸化ナトリウムと……」

「わかった、もういいよありがとう」

僕はやっぱりな、と思いつつ弁当箱を開ける。中身は至って普通で見た目は美味しそうだ。

見た目はね

さて、この必殺料理人渾身の必殺弁当……どうしよう？

「ありがとう姫路さん。とりあえず手洗いに行こうよ」

僕はそう言って必殺弁当をさりげなく横溝の席に置いて姫路さんと二人で手を洗いに向かった。

僕と姫路さんがクラスに戻ると必殺弁当が床に散乱しており、近くには横溝が口から血を吐き、白目を剥いて倒れていた。

「あー！ 酷いです横溝君！！ せっかく腕によりをかけて作ったお弁当を……」

腕によりをかけた結果がこれか……

「吉井……き、さま………謀ったな……！！！」

「なんの事だい？ 僕はちゃんと自分の机においたはずだけどなあ……あ、もしかしたら僕は姫路さんから弁当を貰って舞い上がったいたから不注意で横溝君の席においてしまったのかもしれないね？」

「くっ……だが………姫路さん手作りべ、とうを、食べれ、た………悔いは、な、い………」

そう言い残して意識を手放して逝った横溝。さすがはFFF団員、

こんな時でも考え方が違うな。

「明久君……」

隣では姫路さんがしゅんという擬音がふさわしい感じに落ち込んでいる。

「大丈夫だよ姫路さん。また今度作ればいいじゃないか」

「……そうですね！ それじゃあ食堂に行きましょう！！ 私が奢ってあげます！」

「いや、今日は懐が豊かだから大丈夫だよ」

「えっ」

なんかすごく驚かれた。

結局お昼は僕がラーメン、姫路さんは日替わりランチを食べた。

そして放課後。僕は皆に呼び出された。

「明久、いったい今日はどうしたというのじゃ？」

「……………頭でも打ったか」

「だな、そうでないとカッターを止められるわけがない」

人に聞いておきながら勝手に自己完結させやがったこいつら。

姫路さんは震えている美波の相手をしている。

なんで美波が震えているのかというと、部屋に入った途端いきなり関節技を決めようとしてきたから本気の睨みを浴びせてやったからこそなった。でもそんな事はどうでもいい。

「僕はね、自分を馬鹿と偽る事に疲れたのさ」

「今までうつけ者を演じていたというのかお主は！？」

僕の言葉を聞いた秀吉がすごく驚く。まあ演劇部のホープと呼ばれる秀吉が人の演技を見抜けなかっただから驚くのも当たり前かな。

「毎日理不尽な理由で追いかけて回される事に疲れたんだよ。だから僕は昨日思ったんだ。そろそろ本気出すってね」

「明久……」

「じゃあ僕は帰るよ。それじゃあまた明日」
そう言って僕はクラスを出ていった。

僕がクラスから出てしばらくも立たないうちに秀吉が後ろから追いかけてきた。

「明久ー!」

「秀吉……部活は大丈夫なの?」

「まだ時間まで余裕があるから大丈夫なのじゃ。それより……」

秀吉は目をキラキラさせて僕にこう告げる。

「お主、演劇部に入らんか!」

「……………はい?」

「わしはこれでも演技に自信がある方じゃ。じゃがお主のそのうつけを偽るという演技はさっぱりわからなかった! 頼む、演劇部に入ってくれ! この通りじゃ!!」

「わ、わかったからそんな顔を下げないで!!」

「では入ってくれるかの!」

うっ、そんな潤んだ瞳でこっちを見られると……」

「い、行ける時だけでいいなら……」

すると秀吉の顔がパッと明るくなる。

「それだけでも十分じゃ! ありがとう明久!!」

そう言いながら僕の手を握ってブンブンと振り回す秀吉。くっ、不覚にも萌えてしまった……

「今日は来れなくても構わんから来たい時にわしに言ってくれ! それじゃあの、明久!」

そう言って嵐のごとく去っていった秀吉。

僕は今までの約束をしてしまった気がするけど……まあいい、帰ろう。

僕は再び下駄箱に向かおうとした。すると目の前の部屋から大荷物を持った福原先生が現れた。

「おや、吉井君丁度よかった。この荷物を職員室まで運んでもらえ

ませんか？」

「……………はい」

その後、色々と力仕事を任されてしまい、帰宅したのはかなり遅くなってしまった。

……………今度からはもっと早く帰ろう。

初めのうちはノートを開いてまともに勉強する僕をみて先生達は保健室に行けとうるさかった。

いくら学園一の馬鹿だったからってこの扱いは酷いと思う。
でもしばらくしたらそれも収まってきた。

とある日、僕は暇だったという事もあり秀吉に演劇部に行ってみたいと話してみた。

すると秀吉はすぐ顔を近づけて話し返してくれた。

「ようやくか！　くうく、いつ来るのかと待ちわびておったぞ明久！　今日の放課後4時から新しい演劇の役決めをやるから演劇部室に集合じゃ！」

「うん、わかった。それと秀吉、顔が……………その……………」

「ん？　わしの顔に何か付いておるのか？」

「いや、その、顔が……………近い」

僕の言葉を聞いて秀吉は慌てて顔を離してくれた。

「す、すまん明久！　少し舞い上がっておったようじゃ……………」

そう言って若干頬を染めながら視線を逸らす秀吉。またか、また僕は萌えてしまったのか！

「と、とりあえず4時に部室に集合だね？」

「うぬ、よろしく頼むぞい」

さて、演劇部か……………どんな人がいるんだろうか？

そして放課後。

4時まで時間があつたから僕は適当に時間を潰していたら目の前から美波がやってきた。

「アキ……」

「美波か」

僕が放課後に美波を睨んで震えさせたあの日から美波からの理不尽な関節技はピタリと止んでいた。僕としては嬉しい限りだけどね。

「その……アキ……」

なにか言いたそうにもじもじしている。でも萌えないのは何故だろうか。

もうすぐ4時という事もあつたから僕はその場を去ろうとした。

「何か用、美波？何もないなら僕行くから」

「ま、待って！」

「何さ？もしかして僕に謝ろうとしてる？もしそうならそんな事しなくていいよ」

「え……？」

なぜか美波の顔が少し明るくなる。もしかして僕が『気にしてないから』とでも言うと思ってるのだろうか？

演劇部室。

美波のせいで約束の時間から少し遅れてしまった。秀吉怒ってない
といいけど……

「おお、やっと来たか明久」

「ごめん秀吉」

「いいんじゃないんじゃない。今始まったばかりじゃからのう」

「えっと、ここにいる皆が？」

「演劇部員達じゃぞ。既に明久の事は伝えておるが挨拶はしておく
んじゃぞ」

「わかった、ありがとう秀吉」

僕は軽く部室を見渡す。皆が僕をじーっと見ている。僕は軽く緊張しながらも自己紹介をした。

「吉井明久です。歳とか関係なく気軽に明久って呼んでください」
面白みはないけどなんとか普通に自己紹介が出来た。

「秀吉が直々に勧誘したんだ、期待させてもらうぜ？」

「わからない事があったらなんでも聞いてくださいね？」

よかった、皆いい人ばかりだ。そしてあらかた自己紹介が終わったところで秀吉が皆を纏め始めた。

「よし、それじゃあ今日はロミオとジュリエットの役決めをするぞ
い！」

そして演劇部の活動が終了した後、僕は近くのスーパーに食材の
買い出しに行ったりした。

色々あったけど無事に一日を過ごす事ができた。

ちなみに僕はロミオ役になった。なぜだ……………

数日後。

今日は学園長から直々にお話があるらしい。
どうせ下らない内容だと思うけど。

「よし、集まったねお前達。今日は重大発表があるから耳の穴か
つぼじってよく聞きな」

相変わらず口の悪い学園長だな。さっさと終わらないかなあ……
と考えていたら学園長は軽く息を吸い一気に言い放った。

「全校クラス対抗で試験召喚戦争バトルロワイヤルをやるよ！」

『んぬあにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!』

学園中の生徒がおそらく始めて息があった瞬間だったと思う。

Fクラス。

「あのババアまたろくでもない事考えつきやがって……」

「でも勝てば各クラスの望みが一つなんでも叶うのじゃろ？」

「……………だったら勝ちにいく」

「当たり前だ、やるからには必ず勝つ。なんとしてもな」

なんだかんだ言いながらも雄二はやる気まんまんのようだ。

ちなみに全学年クラス対抗バトルロワイヤルのルールはこんな感じだ。

1. 戦闘はクラス対抗戦とする。
2. 三学年は二・一学年のクラス代表を、二学年は一・三学年のクラス代表を一学年は二・三学年の討ち取る事は出来ない。
3. 制限時間は12時間。補給は1時間に一回補給専用の部屋で行われる。
4. 戦場は特別に建設した建物の中で行われる。
5. 一年生は持ち点が自分の点数＋50点加算される。
6. クラス代表が戦死した場合、そのクラスの生徒は強制失格となり、別室にて観戦する事になる。

なんともわかりづらいルールだ。

だけどこのカビ臭いクラスとおさらばできる最大のチャンスでもある。

「それじゃあ代表会議に行ってくるとしますか」

そう言って雄二はクラスから出ていった。

一年生は振り分け試験前だから実力はバラけているから大丈夫だと思っけど先輩、つまり三学年のFクラス代表がネックとなるだろう。それを雄二が上手く丸め込めるかに今回のバトルロワイヤルの鍵がかかっている。

上手くやってくれよ雄二……

数時間後。

「うーす。今戻ったぞ」

「おかえり坂本」

「おかえりなのじゃ。……………どうだったんじゃ？」

「ああ、なんとか丸め込んだ。俺の言う通りに行動してくれる事を約束してくれた」

それを聞いて僕は雄二を褒めようとしたがふと視界に入った雄二の拳を見て考えが変わった。なぜなら雄二の拳から血が滴っていたから……

それはともかく。僕もバトルロワイヤルに向けて準備をしなければ。

「明久、演劇の事も忘れるでないぞ」

……………訂正。

僕もバトルロワイヤルと演劇に向けて準備をしなければ。

そして更に時は経ち……
いよいよ開催の日がやってきた。

「よしお前ら！ 今日俺がお前らを勝利に導く！！ 一年生はわからない事があつたら今のうちにその辺の上級生に聞いておけ！
先輩方も頼むぞ！」

『うおおおおおおおおおおおおお！！！！！！』

どうやら皆気合は十分みたいだ。これは僕も頑張らないといけないな。

そして雄二が作戦の説明を始める。

「前線部隊は吉井明久と姫路瑞希を主軸に戦場をかき回せ！ 腕に自信があるなら二人に任せないで遠慮なく暴れ回れよ！ 頼むぞ明久、姫路！！」

「任せてください！」

「任せてよ、雄二」

「陽動部隊は敵を前線に引き込むようにしろよ！ 決して無茶はするな！！」

「わしは陽動部隊じゃな」

偵察兼奇襲部隊はムツツリー二に任せる！ 頃合いをみて攻撃して
いってくれ！」

「……………任せろ」

本陣を守る近衛隊はしっかりと俺達を守ってくれよ！ 俺達Fクラ

スは一学年でも欠けたら危ういからな!!」

「ウチは近衛部隊ね」

「それじゃあ各自点数に問題はないな？ それじゃあ戦争開始まであと20分。各自それぞれの持ち場に付け!!」

やっぱり雄二のカリスマ性はすごいな。なんせ人の心を確実に掴んでくるもの。

そう思いながら僕は前線部隊の集まる位置に向かった。
すると後ろから僕に声をかけてくる人がいた。
誰かと思い、後ろを振り返るとそこには姫路さんがいた。

「あ、あの……明久君」

「ん？ どうしたの、姫路さん？」

「えっと……お、お互い前線部隊として頑張らましようね!!」

「そうだね、でも姫路さんは体調崩さないように気をつけてね？」

「は、はい！」

【まもなく試験召喚戦争バトルロワイヤルが始まります。繰り返します。まもなく……】

「つと、もうすぐ始まっちゃう。急ごう姫路さん！」

僕は姫路さんの手を取り持ち場に急いだ。

なんか後ろで姫路さんがブツブツ言ってたけどよく聞こえなかったや。

さあ、戦争の始まりだ。

僕の本気を皆に、見せつけてやろうじゃないか。

中編

前線。

す、すごい……混沌とはまさにこの事を言うんじゃないかな。
それ程までに前線がすごい事になっているんだ。

「よし！ 暴れたい奴はトコトン暴れるんだ！！ 他の奴は点数
が少ない奴を狙っていけ！！」

『うおおおおおおおおお！！！！』

「行こう姫路さん！」

「ええ、行きましょう明久君！」
ちようにどいい事に今のフィールドは日本史。これならインパクト
を与えられるはずだ！

「「試獣召喚！！」」

Fクラス 姫路瑞希 日本史 322点

&

Fクラス 吉井明久 日本史 398点

ちっ！　ギリギリ腕輪ならずか……でもこれだけあれば十分だ！！

「皆纏めて木刀の餌食にしてやる！！」

「な、なんだあの点数！？」

「あいつは確か学年一の馬鹿の吉井だぞ！　　どういう事だよ！？」

「姫路さん今だ！」

「はい！」

僕の召喚獣が敵の召喚獣の体制を崩した。その隙に姫路さんの召喚獣が敵の召喚獣に向けて大剣を振りかぶり、次々と討ち取って行く。

「戦死者は補習うううううううううう！！」

戦死した生徒を鉄人が次々と文字通り持っていく。

どうやったら一度に20人近くも持てるんだろうか、すごく気になる。

「明久君危ない！」

ちよっただけ考え事をしていた隙に別の召喚獣が僕の召喚獣を襲おうとしていた。

姫路さんが助けてくれなければ危なかった……

「余計な事を考えてる場合じゃない！！」

そして僕は勢いよく敵陣に飛び込んでいった。

戦場。

すごいです、明久君！

残念ながら腕輪持ちまでには至りませんでしたがそれでも日本史は私の点数を軽く越えてましたからね……

それにしても敵の人の数が多すぎます。これじゃいつもより早くへたっちゃいそうです……

で、でも明久君の前でそんな弱音は吐けません！

美波さんには悪いですがここで好感度を上げさせてもらいます！！

も、もちろんクラスの勝利の為に頑張りますよ？

Fクラス本陣。

「な、なに？ 明久が400点近くを叩き出しただど！？」

偵察部隊からその連絡を受けた俺は驚愕していた。

「ここに来ていい誤算が来るとはな…… ムツツリーニ！戦況はど

うなっている!?!」

「今の所被害が一番大きいのはCクラス。まるで討ち取ってくれと言わんばかりに満遍なく戦死しているのを確認した。」

「そうか……よし、奇襲部隊! Cクラスの代表どもを討ち取ってこい!!」

「……………了解、行くぞ」

俺の命令でムツツリーニ率いる奇襲部隊がCクラス本陣へと向かう。

まずは一つ……この調子だと思ったよりも早く進められそうだな。

陽動部隊。

【戦況報告です。Cクラス一・二・三学年のクラス代表がFクラスに討ち取られました。繰り返します……】

早速坂本が動いたのかの!

まずは出だしは好調、と言った所じゃな。

「その一年生! あまり踏み込む過ぎると戦死するぞい!」

「は、はい!」

わしらはわしらのやる事をするだけじゃ。
頼むぞ明久、姫路、ムッツリーニ、坂本……………

戦場。

「雄二の奴いきなり飛ばすじゃないか！」

「それにしても私達の周りだけ敵が多過ぎる気がしますっ！」

「多分、主力を潰せばあとはなんとか考えると考えてるんだよ!!」

たしかに僕と姫路さんの周りだけ敵が多過ぎる。

僕は別に大丈夫だけど姫路さんが心配だ……それに点数もかなり減ってきてるし……………

【戦況報告です。只今より教科フィールドを日本史から現代国語に変更します。繰り返します……】

ナイスタイミング！

そして間もなく皆の点数が日本史から現代国語に変わっていく。

Fクラス 吉井明久 現代国語 284点

&

Fクラス 姫路瑞希 現代国語 451点

現代国語はあまり取れてないか……
でも姫路さんが腕輪持ちになった！
とりあえずこれでなんとか
するはず！！

「姫路さん！ 腕輪！！」

「は、はい！」

僕が姫路さんに合図を送ると姫路さんの召喚獣は右手を前に出し
手から熱線を繰り出した。

突然の事に対処が出来なかった相手は熱線に巻き込まれて何人も
の召喚獣が焼き尽くされた。

「とりあえず他の前線部隊と合流しよう！
だいぶ戦場は掻き回せ
たはずだ！！」

「わ、わかりました！」

そして僕と姫路さんは他の前線部隊と合流するために、戦場を走
り回り始めた。

近衛部隊。

まだ数学がこないわね……これじゃあウチが活躍出来ないじゃな
い！

ウチはその点数の低さから他の近衛部隊の一員のカバーに徹して
いた。

数学に……早く数学に変わりなさいよっ！

奇襲部隊。

「ムツツリーニ君みーつけた♪」

「……………工藤か」

俺はCクラスの本陣に奇襲し成功して本陣に戻ろうとしていた。
その途中にAクラスの工藤愛子に遭遇してしまった、というわけだ。

「どうしよっかな〜？」

「くっ……………」

まずい……………今のフィールドは俺の得意分野、つまり保健体育ではない。

という事はこのまま工藤と戦っても瞬殺されるのがオチなのだ。

「……………なんとしても逃げ切る」

俺は他の奇襲部隊に逃げるように合図する。
だが工藤はいつまで経っても攻撃してこなかった。

「……………なぜ攻撃しない」

「だってボクは保健体育でムツツリーニ君と戦いたいんだもの。それよりこんな所で油売ってていいの？　今頃BクラスがFクラスの本陣に向かってる頃だよ？」

「……………なんだと!？」

「本当だよ。だから早く戻ったほうがいいんじゃない？」

「……………感謝する」

「貸し一つだからねー!!」

俺は全速力で本陣に戻る事にした。

……………急がねば

本陣。

クソ……根本の野郎いきなり本陣に突撃させてくるとは気でも触れたか!？

「いいか！　なんとしても負けるな!!　ここで持ち堪えないと俺達は勝てないぞ！」

こんな所で負けてられるか！　堪えるんだ……!　すると黒い忍者服の召喚獣が敵を闇討ちにしていく。その正体は少し離れた所に肩で息をして立っているムツツリーニ

と奇襲部隊だった。

「……………すまない、遅れた」

「ムツツリーニか！ ナイスだ！！」

そして俺達はなんとかBクラスを退ける事ができた。

戦場。

僕と姫路さんは無事にほかの前線部隊と無事に合流し、片っ端から敵を蹴散らしていた。

既に流れた放送だとCクラス全学年、Eクラス全学年、Dクラス三学年が負けた事になっている。

つまり前線の混沌さも少しづつ薄まってきているという事だ。

体力がなくなりかけている姫路さんには無理をさせずにその分僕と他の前線部隊が頑張る。今の所はそれでなんとかなっていた。

「見つけましたわ！ 今日こそお姉様を惑わす豚野郎を美春が成敗してあげますの！！」

そう言って僕の前に躍り出てきたのは清水美春。美波を愛してやまない人で、俗に言う同性愛者というやつだ。

「清水さんか……」

「豚野郎！　よくもお姉様を汚い地に這い蹲らせましたわね！！」

そう言って清水さんが取り出したのは一枚の写真。

その写真は僕がFクラスで美波がしかけてきた関節技を振り返りにした時の写真だ。

美波の顔が若干涙目になっており、ドSが見たらいい感じに発狂するのでないだろうか？　と言える程恐ろしいなまでにいい写真写りだった。

「ああ、それか……」

「それ？　それとはなんですか！？　私の大事なお姉様をこんな目にあわせたのですから死ぬ覚悟は出来てますわよね！？」

「ちょっと待って」

「なんですか？　私、豚野郎と話す舌は持っていないんですが？」

「清水さん。君はその写真を見てどう思った？」

「どうってあなたをミンチにしないと気が済まない程憎くなりましたわ！　他には………それだけですわ！」

ふふ、一瞬口が止まったね？　僕はそれを見逃さなかった。

「いや、君は僕に対する殺意以外にも一つ、思った事があるはずだよ？」

「な、何を言い出すのですか!!」

「君は涙目になって地に這い蹲らせてる美波を見てきつと何か別の感覚がしたんじゃないかな？ あのどんな男よりも雄々しいお姉様が地に這い蹲らせて涙目になっている……君はそれを想像して新しい感覚に没頭……つまり興奮したはずだ！」

「そ、そそそそんな事はありませんわ！ そんなのありえないですわ!!」

「だったらなんでさっき口が一瞬止まったのかな？」

「それは……あなたをどんな目にあわせようか偶然その時に考えていたのですわ!!」

「いや、違うね。君は間違いなくこの事を考えたはずだ。そしてできる事なら自分でお姉様をあんな顔にさせてみたい、と。そう、君は………」

僕は清水さんに左腕を上にあげ、そのまま勢いよく振り下ろして清水さんを指差す。

「ギャップ萌えに目覚めてしまったんだ!!!!」

「ぐぐぐぐ………そんな事は、そんな事はあああああああああああああ!!」

ふふ、どうやら図星みたいだ。そのせいか隙だらけだよ清水さん

!!

「よし、今だ姫路さん！」

「わ、わかりました！」

清水さんと共に頭を抱えて悩んでいる清水さんの召喚獣に向けて
姫路さんの召喚獣が躊躇なく大剣を振り下ろした。

当然清水さんは戦死し、どこからともなく現れた鉄人に連れてい
かれた……………

ふっ、自分の性癖を誤魔化すからそういう事になるのさ……

「明久君、それはなにか違うと思います……」

ほっといってくれ姫路さん。僕は今最高にハイなんだ。

そして戦争中断の合図が鳴り響き、一時間の休憩タイム。つまりは
お昼ご飯の時間がやってきた。

本陣。

「明久！ てめーすごいじゃねえか！！」

「……………点数がAクラス並だった」

「たしかに阿修羅のような暴れっぷりだったのう。しかも姫路もいたしの。これこそまさに向かう所敵無しじゃの」

「そ、そんな事ないですよ！ それに明久君は疲労が溜まった私の分も戦ってくれてましたし……………本当にありがとうございます明久君」

「そんな事はないさ。姫路さんの援護が無ければ戦死してもおかしくはない状況でもあったからね」

「明久君……………」

「(くっ……………吉井の奴!)」

「(どうしますか隊長!)」

「(鉄槌を下そうにも……………謎の結界で近づけそうにもないです!)」

「(しばしの……………戦争後までの我慢だ!!)」

「(くっ……………了解です!)」

そこのFFF団。しっかりと聞こえてるからね？　しかし戦争後……………なんとしても逃げ切らなければ。

「雄二。午後はいったいどうするつもりなんだ？」

「その辺はしっかりと考えている。俺に任せとけ。」

【まもなく試験召喚戦争を再開します。戦死していない生徒はただちに自分の持ち場に急いでください。繰り返します……………】

「つと、もうそんな時間か……皆、午後の部も頼んだぞ!!」

『うおおおおおおおおおおおおおお!!』

腹も溜まってますます気合十分のFクラス陣。この勢いなら誰にも負けない、そんな気がした。

前線。

【戦況報告です。Dクラス一・二学年とBクラス二学年がAクラスにより、討ち取られました。繰り返します………】

始まって早々討ち取りに行ったのか……これでDクラスは全滅、Bクラスからは根本がいなくなった。

という事はBはもう脅威ではない、という事だ。

ちなみに今の教科フィールドは化学。僕は化学はあまり得意ではないから姫路さんの援護に徹している。

「やっぱり上位クラス……一筋縄ではいかないね!」

「たしかにそうですね! そろそろ補給を受けないとまずいですし……!!」

「たしかにそろそろ全教科が一周する頃だね! でも時間としてはちょうどいい……姫路さん! 君だけ先に補給を受けてくるんだ!!」

「え!? で、ですが……」

「抜けた穴はしっかりと埋めておくあら安心して!!　そうだろう皆!?!」

「任せときな!」

「姫路先輩が来るまで全力で死守しますよ!」

「姫路最高!!」

「俺と付き合ってくれー!!」

……少し関係ない言葉が聞こえた気がするけどまあいい。

「というわけだ姫路さん!」

「わかりました!　皆さん頑張ってくださいね!!」

僕らに励ましの言葉を残して姫路さんは補給室に向かっていった。

「よし!　やるぞ皆!!」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!』

本陣。

「姫路が補給を受けに行ったか……よし、陽動部隊の三学年を全員前線に回せ!　なんとしても維持するんだ!!」

【戦況報告です。Bクラス三学年がAクラス、Aクラス三学年がB

クラスの手により討ち取られました。繰り返します……………」

なんて偶然だ。まさかほぼ同時に討ち取られるなんて事があるとはな。

これで残ったのはBクラス一学年、Aクラス一・二学年、そしてFクラス全学年だな。

三学年はこれで欠けない戦力となった。一学年は実力別に分けられてないからどうにかなる。

という事は、Fクラスの勝利は俺達二学年にかかっているという事。だが今回は俺も勉強してきた。それに明久も本当の実力を見せてきた。悪いが翔子、今回は勝たせてもらおうぞ……………！！

「伝令ー！！」

そう叫びながら俺の元に来たのは一学年の偵察部隊の一人だ。よほどの事があったらしい。息絶え絶えになりながらも俺に事件を教えてくれた。

「姫路先輩が、姫路先輩が……」

「落ち着け、姫路に何があった？」

「姫路先輩が……………Aクラスに拉致されました……」

「……………なんだと!？」

「補給室から出た所をAクラスの部隊が大勢で……」

くそっ！ まさか補給室から出た直後を狙って来るとはな……………な

んだ？ 狙いは人質ってわけか？

俺が考えているとふと視界に教科フィールドの予定表が目映った。……………ま、まさか！？

「おい！ 誰か次の教科フィールドの変更時間と次の教科を教えろ！！」

「次の変更時間はあと15分程です！ 教科は……………保健体育です！！」

くそっ！ 翔子の奴教科フィールドが変わった瞬間に工藤を使って姫路を討ち取るつもりだな！？ だがそうはさせねえ！！

「ムツツリーニ！！ 前線から明久を拾って本陣に行け！！ だが暴れようとはするなよ！！」

「……………了解」

なんとか間に合ってくれよ……………！！

前線。

僕はやってきたムツツリーニの言葉に衝撃を受けた。

「姫路さんが拉致された！？」

「ああ、坂本の命令でお前を連れて救出してこいとの事だ」

「わかった！ 皆！ 僕は今から拉致された姫路さんを救出してくる！！ その間陽動部隊も前線に投入してなんとしてもここを死守していてくれ！！」

「任せときな！」

「絶対に救出してきてくださいよ！」

「陽動部隊を呼んでこい！ 俺達の底力を見せつける時が来たぞ！」

よし、これならきつと大丈夫だ。

僕はムツツリーニと共に急いでAクラス本陣に向かっていった。

Aクラス本陣。

「翔子さん！ これはどういう事ですか！？」

「……どういふも何も、あなたは人質。暴れるだけ無駄。これだけの絶対数であなたが脱出できる確率は0に等しい」

たしかに、周りにはたくさんのAクラスの方が私を包囲しています。

正直脱出はできそうにもありませんね、ですが……

「Fクラスはどんな時でも諦めたりなんかしないんです！ それに私だってFクラスの一員なんです。なので、諦めたりなんかしませんっ！！ 試獣召喚！」

私はそう叫び召喚獣を呼び出しました。私一人でも何人かは討ち取れるはずです！

Fクラス 姫路瑞希 化学 479点

「400後半だと!？」

「霧島に匹敵する点数じゃねえか!!」

「行きます!」

私の召喚獣は大剣を薙ぎ払い、敵の召喚獣を蹴散らしていきました。

熱線を撃ち込み、大剣を振り下ろし、まるで明久君が遊んでいた三国志を元にしたゲームのようでした。

「そこまでだよ、姫路さん」

「久保君……」

「悪いけどあの時のリベンジをさせてもらおうよ!」

「久保君……負けません!」

久保君の召喚獣が片方の大鎌を振りかぶってきたのを私の召喚獣は大剣で受け止めました。

「もらった!」

すると久保君の召喚獣がもう一つの大鎌でこちらを攻撃してきました。ですがまだ甘いです！

「熱線！」

私の召喚獣は大剣から片手を離して久保君の召喚獣に向けて熱線を放ったんです。

「くそっ、でも次は僕が勝ってみせるからね！」

そう言って久保君は西村先生に連れていかれました。すると一部始終を見ていた翔子さんが私に話してきました。

「流石は瑞希。でもそれももう終わり」

【戦況報告です。只今より教科フィールドを化学から保健体育に変更されます。繰り返します……………】

「保健体育…………ま、まさか！」

「そのまさか。やって、愛子」

「悪いね、瑞希ちゃん。これも代表からの命令ってやつだからさ」

Fクラス 姫路瑞希 保健体育 347点

V S

Aクラス 工藤愛子 保健体育 459点

「ひ、100点差……」

「ばいばい♪」

そう言って愛子さんの召喚獣が手に持つ大斧をこちらに振り下ろしてきました。残念ですが私はここまで見たいです……

「姫路さん！」

私は聞き覚えのある声が聞こえたのでふと声が出た方を見るとそこには明久君と土屋君が立っていました。

Aクラス本陣。

やっと敵本陣に着いたはいいいけど姫路さんが工藤さんに打ち取られそうになっていた。

「……………明久頼む！」

「OK！」

僕の召喚獣はムツツリーニの召喚獣を持ち上げて工藤さんの召喚

獣目掛けて思いっきり投げつけた！

「……………加速」

「う、うそ……」

投げつけた速度＋ムツリーニの腕輪の力でありえない速度で工藤さんの召喚獣に接近し一閃。工藤さんの召喚獣はあっけなくやられてしまった。

「……………加速、終了」

Fクラス 土屋康太 保健体育 808点

「800点越え……ますます君との差が開いちゃったや」

とうとう保健体育で高橋先生並の点数を取ってしまったムツリーニ。本当こいつを見ていると信念に不可能はないって思えてくるよ。

「……………すまない工藤。恩は仇で返す事になった」

「いいいいいよ。後日……その、別の事で埋めてもらうからさ!!」

そして工藤さんは鉄人に連れていかれた。ムツリーニ……工藤さんと何かあったんだろうか？ っとそんな事より……

「ムツツリーニ……後は僕がやる。いや、僕にやらせてほしい」

「……………大丈夫なのか？」

「今はなんだか負ける気がしないんだよ」

「吉井。あなたが私に挑むのは無謀」

「そんな事はないよ。現に……ほら！」

Fクラス 吉井明久 保健体育 337点

vs

Aクラス 霧島翔子 保健体育 391点

残念ながら腕輪には至らなかったしやっぱり霧島さんの方が点数がちよっと高めた。でもこの程度の点数差はなんて事ない。

「覚悟してよ霧島さん」

「……………くっ」

僕の召喚獣が霧島さんの召喚獣に攻撃を浴びせ続ける。僕は観察処分者だしそれに伊達にFクラスとして戦っていない。先生を除き僕は学園一の操作能力を持っていると思っている。

「悪いけど一気に決めさせてもらおうよ!!」

「……………」

そして木刀が霧島さんの召喚獣の脳天に直撃し、霧島さんは戦死となった。しばらくすると戦況報告の放送が流れ始めた。

【戦況報告です。Aクラス二学年がFクラスの手により討ち取られました。繰り返します……………】

僕はその場に立ち尽くしている霧島さんに問いかける。

「あとは一学年だけだね。でも僕達はまだ全学年残っているよ？
どうする？」

「……………降伏する」

それを聞いた一年生の代表は霧島さんに文句を言っていたが霧島さんに自分達の置かれている状況を教えられ、渋々ながらも降伏を承諾してくれた。

【戦況報告です。Aクラス一学年が降伏しました。繰り返します……………】

すると降伏宣言の報告の後に戦況報告から戦争終了の放送が流れ
てきた。

【Fクラス以外の全ての組が負けとなったのでこのバトルロワイヤ
ル、Fクラスの勝利となります！ 繰り返します……………】

「……………やったな明久！」

「やりましたね明久君！」

これで今度こそ僕達Fクラスの勝ちだ。

僕とムツリーニと姫路さんはハイタッチを交わし、自分達の本陣へと戻っていった。

大広場

学園の生徒達は皆ここに集まって結果発表の公表を待っていた。とは言っても既に皆知っているからあまり意味はないのだが……

「さて、結果発表を始めるよ！ 今回見事勝ち残ったのは……なんとFクラスだ！ これを予想できた奴なんか誰一人としていなかっただろうにねえ」

自分達のクラスの名を呼ばれたFクラスは当然大喜びして騒ぎ始める。雄二のやつ胴上げされてるじゃないか。それにまんざらでもないって顔してるな。

僕がその光景を少し離れた所で見てみると突如現れた秀吉が僕の手を掴み、どこかに走り始めた。

「ちよ、ちよつと秀吉!？」

「準備もしなくてはいかんというのに何をあんな所でボーツとしとるんじゃ！」

「ちよ、ちよつと待つて秀吉！ 腕が、腕が千切れるから！！ それに準備つて……いたっ！？」

いきなり立ち止まる秀吉。突然の事に僕は秀吉の後頭部に鼻を勢いよくぶつけてしまった……痛い。

「ほれ、はやく着替えんか！」

そういつて僕に渡してきたのは……服？

「もうすぐ開演じゃぞ！」

「開演……なにが？」

「ロミオとジュリエットに決まっとるじゃろう」

えええええええええええええええええええええええ

! ?
└

後編

ロミオとジュリエット。

舞台は14世紀のイタリアの都市ヴェローナ。そこではモンタギュー家とキャピュレット家が、血で血を洗う抗争を繰り返していた。

モンタギュー家の一人息子ロミオは、ロザラインへの片思いに苦しんでいた。気晴らしにと、友人達とキャピュレット家のパーティに忍び込んだロミオはキャピュレット家の一人娘ジュリエットに出会い、たちまち二人は恋におちる。

二人は修道僧ロレンスの元で秘かに結婚。ロレンスは二人の結婚が両家の争いに終止符を打つきっかけになる事を期待する。

しかし、その直後ロミオは友人と共に街頭での争いに巻き込まれ、親友のマキューシオが殺されてしまう。その事に逆上したロミオはキャピュレット夫人の甥ティボルトを殺してしまうのである。

ヴェローナの大公エスカラスは、ロミオを追放の罪に処する。一方、キャピュレットは悲しみにくれるジュリエットに大公の親戚のパリスと結婚する事を命じる。

ジュリエットに助けを求められたロレンスは、彼女をロミオに添わせるべく、仮死の毒を使った計略を立てる。しかし、この計画は追放されていたロミオにうまく伝わらなかった。

そのため、ジュリエットが死んだと思ったロミオは彼女の墓で毒を飲んで死に、その直後に仮死状態から目覚めたジュリエットもロミオの短剣で後を追う。

事の真相を知り悲嘆に暮れた両家は、ついに和解するという物語

だ。

ロミオとジュリエットは悲劇として有名だけどよくある登場人物の性格から起こる悲劇ではなく、周囲の状況や偶然などの「運命」と呼ぶべきものが、両者や周囲を悲劇的結末へと導いていくという物らしい。

そして僕はなぜかロミオ役に抜擢された。演劇なんかした事が無い素人の僕がいきなり主役……これが噂の主人公補正という奴なんだろう。ジュリエット役は秀吉。間違いない、これは主人公補正が発動している。

なんてバカバカしい事を僕が考えているうちに演劇は無事に進んでいき……………

おそらく小学生が意味はしらないけどよく使う言葉として名高いあの台詞を言うシーンがやってきた。

このシーンはジュリエットの事を忘れられなかったロミオがこっそり果樹園に忍び込んだら偶然ジュリエットが一人でいたので彼女の近くにある木に登り神のフリをしてみる、というシーンだ。早い話が不法侵入ってわけ。

「おおロミオ、どうしてお前はロミオなの？ 私を想うならあなたのお父さまをすてて、お名前を名乗らないでくださいな。もしそうなさらないなら、私への愛を誓って欲しいですわ。そうすれば、私はキャピュレット家の人でなくなりましょう。」

さすがは秀吉。まるでジュリエット本人のようだ。

「もしあなたがロミオという名前が気に入らないのなら、もうぼくはロミオではない。恋人とでも何とでも好きなように呼んでくれ」

……なかなか恥ずかしい台詞だ。劇団の人たちはなんでこんな台詞を平気で言えるのか不思議で仕方ないや。

っと、まだ台詞があるんだった。

「彼らの刀20本よりも、あなたの瞳の方が私には恐ろしいのです。もしあなたが私をやさしく見守っていてくれるなら、彼らの敵意など関係ありません。彼らの憎しみによってこの命が終わる方が、あなたの愛なしに命長らえるよりもずっといいのです。」

うう、演技じゃなかったらこれは公開処刑じゃないか。そして秀吉が聞き返す。

「どうやってこの場所に入ってきたのですか。どなたの案内で来たのでしょうか。」

そして僕は軽く息を吸い、はつきりと答える。

「愛に導かれてやってきました。案内人などいません。しかし、あなたがどれほど離れていようと、そこがはるかな海に洗われている広々とした岸边だとしても、私はあなたのような宝を求めて旅に出ますよ。」

そして秀吉の顔が真っ紅に染まっていく。そ、そんな顔されたら

僕は何か目覚めてしまいそうだよ秀吉！！

ふと雄二達のいる所を見てみたらあのゴリラ、笑いを堪えていやがった……その後ろではF F F団が秀吉にラブコールを送っている。あいつら静かに見れないのか？　そして姫路さんはジーっとこちらを見ている。どうやら演劇に夢中になっているみたいだ。

「……明久！」

「……と、ごめん！」

その後も僕達は特に致命的なミスもせずに劇は順調に進んでいき、そしてとうとう最後のシーンがやってきた。

ちなみに僕はもう既に死んでいる。残るは秀吉の演技だけだ。僕はこんな感じでよかったのか、上手く演技できていたのだろうか。なんて事を考えながら死体のフリをして横たわっていた。

すると僕の唇に温もりがやってきた。そして観客側から悲鳴と歓声と怒号が入り混じった声が聞こえてきた………まさか！？

僕が急いで目を開けると眼前には秀吉の顔のドアップ。つまり……

[illegible]

秀吉の唇が、僕の唇、ファースト……ええ！？

しかしここで慌

て始めると劇が台無しになってしまふ。僕は頑張って動揺を心の中に押し込めていた。そして秀吉は僕の唇からその唇を離し、僕の身体に刺さっている（ように見える）短剣を引き抜き、一言呟く。

「ロミオ。今私もそちらに……」

そして秀吉は短剣を逆手に構え、自分の腹部に刺して僕の胸に倒れこんだ。

そして暗転。

僕と秀吉は素早く立ち上がり、裏へと戻る。裏に着いた僕は秀吉に質問した。

「なんでキスしたの!？」

「ただのアドリブじゃ。おかげで盛り上がっておったじゃろ？ ほれ、まだ劇は終わっとらんのだから裏方の仕事を始めるぞい」

僕の質問にごく当たり前の、いつもの様に答える秀吉。そんな秀吉に僕が困惑していると一人の演劇部員が僕に話しかけてきた。

「木下先輩って演劇に関しては本当に真剣に取り組む人で自分が主人公かヒロインの時にこういうシーンがやってくると必ずキスをするんです。その方が盛り上がるからという理由で……」

な、なんと……秀吉、君はそこまで演劇に真剣だったのか……感動したよ。

そして無事に演劇も終わり、観客からは大喝采。初めての演劇だったけどこういうのも悪くないかなって思ったかな。それに明日からは設備がAクラス並に補修されるんだ、色々と楽しみだな。

ちなみに、劇が終わってしばらくした後、FFF団が僕を襲ってきた事は言わなくてもわかると思う。

終

「そして色々あって僕と秀吉は結ばれる……………っていう話を考えたんだけどどう思う!? これ賞狙えるんじゃないかな!？」

僕は自分のアイデアを文にした物語を読み終えて皆に感想を聞いてみた。

「明久……………そう言うのはネットワークで公開するもんだ。そんなで持ってギネスに認定されるぐらいに叩かれてこい」

「……………駄作」

「なんでウチが嫌われキャラクターになってのよ!」

「な、なんで木下君と明久君が結ばれるんですか!! 出来るなら私が……………」

なんだか皆の反応が悪い。

い、いや僕のセンスがあまりにも高すぎて凡人には理解出来ない作品なんだ! きっとそうに違う!!

「明久……………どうして儂を演劇の心を知っておるのじゃ?」

秀吉は凶星、と言った顔で僕に質問してくる。え? うそ、つまり……………

「キス……………するの?」

「うぬ」

そしてしばらくの沈黙。

「秀吉、僕は演劇部に入部するよ。そしてロミオとジュリエットをやろう。僕がロミオで秀吉は肩が撃ちつらぬかれるように痛い痛い！！！！！！」

「アキ、少しお話しようか？」

「明久君……？ 少しお話が……」

「え、え？ ちょっと美波？ 姫路さん？ 僕の腕を握ってどこに連れていくの！？ ねえ、ねえ！？」

ここは文月学園。

最近は特に目立った行事もなく、平和？な毎日が送られている。

おわり。

終（後書き）

次は後書きです。

見なくても支障は全くありません。
むしろ時間の無駄です。

あとがき。(前書き)

本当に見るだけ時間の無駄ですよ？

あとかぎ。

こんにちは。

このSSの書いていました◆LLhURARKH2と申します。

読み返せば読み返すほど酷い出来だと思えますね、本当に。

初めはこのアイデアを思い浮かべた時こちらに連載させるか迷ったのですがさすがに3本同時進行は難しい……

という事でニュー速vip板にて書かせていただきました。

書き溜めをせずにスレを立て、コテハンも付けずにのろのろと書いていて本当に申し訳ないです。

そして少し目を離れた隙に閲覧者が途轍もない数になっており、混雑による処理の遅さが原因で私はスレに入る事すら不可能になっておりました。

そしてそのスレは落ちてしまい二回目のスレ立て……

ちょうど金曜ロードショーでコナン君がやっていたのもあり、やっぱり諦めて大人しく書き溜めしようと思ひ二回目もあっけなく落ち………

そして三回目！

書き溜めは終わっておりなんとしても完結させるぞと意気込んだの投稿。

投下し続けて何時間………なんとバイトの時間がやってきたのです。

仕方ないのでバイトにGO。

でも店長は寝ており、楽に投下が可能な状況でした。なので少しずつ投下していた所………

なんと正社員の登場。

これまた仕方なく投下を断念して仕事に専念しバイトが終わってスレを確認したら………

落ちている………だと!?

やはり単純に面白くなかったのでしょう。
あまり保守もされずに落ちていました。

スレにて。もしもこれが落ちていたらこちらで投稿させていただく
という事を書いていたのでこちらに投稿という形となったのです。

つまらんから落ちたのだろう。そんな糞SSこんな所に投下しない
で大人しく埋もれとけや。と思う方もいるかもしれませんが。
ですが私はなんとしても完結させると燃え上がっていたのです。み
つともない悪あがき見せてすみません。

そして書きあげた文。
書いているうちにいつのまにかアンチ美波に……………なぜ
だ。

しかも明久のキャラがブレまくっているんです。
そしてまさかの明久の妄想オチ……………
本当打ち切りみたいで申し訳ないです。

ですがこの形以外でこのSSの完結方法が思い浮かばなかったん
です。

いえ、言い訳はみつともないですね。言いたい事があったらドンド
ン感想にて教えてください。全て受け止めます。

というわけでこのSSも今度こそおしまいです。

スレにて読んでくれていたVIPPERの皆様、ここで読んでくれた小説家になろうグループを利用している皆様。

こんな糞SSを後書きまで読んでくれてありがとうございました。

今後も短編向けのSSを思いついたらニュー速vip板で◆LLh
URARKH2として活動していくつもりです。

それではまたいつかvip板にて出会えたらあいましょう。

2011. 11. 29. 執筆者◆LLhURARKH2

あとがき。 (後書き)

でもいつもはこちらでひっそり活動中だったり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9562y/>

明久「そろそろ本気出す」

2011年11月29日12時59分発行